

2 幼児期の子どもを持つ父親役割に関する研究

－父性行動に影響する要因－

高知女子大学保育短期大学部 ○宮 上 多加子（26回生）

大分医科大学医学部看護学科 益 守 かづき（33回生）

高知女子大学 中 野 綾 美（27回生）

高知女子大学 山 崎 美恵子（5回生）

I はじめに

現代社会における家族の構造上の特徴として、拡大家族から核家庭へという家族形態の変化と、出生率の低下に伴う子どもの数の減少が上げられ、家庭育児においては、親のみが数少ない子どもに関わるという状況が増加している。さらに女性の高学歴化と就業状況の変化に伴う共働き世帯の増加、地域社会における人間関係の希薄化等の社会状況の変化に伴って、父親も育児に積極的に参加することへの期待と必要性は高まっている。しかし、父親役割に関する研究はまだ端緒に就いたばかりであり、父親の育児参加の状況や父親の役割、また父親の意識に関する研究は散見されるが、父親が役割を遂行するために行っている行動に影響する要因については、まだ知見に乏しい。

我々は前回の研究において、父性行動を包括的にとらえる試みとして、父性行動をいくつかの特徴から分類して調査を行い、父親のとっている父性行動の実態と、父性行動全体に影響する要因に関して分析を行い報告した。しかし、家族の状況や考え方によって、父親の行っている行動は様々であり、またその量やバランスも異なると思われる。そこで今回の研究では、調査地域を広げ父親の背景を拡大するとともに、父性行動の中でも特徴的な行動について父親の持つ要因との関連を詳しく分析し、若干の知見を得たのでここに報告する。

II 研究方法

高知県全域の28ヵ所の保育所に通園している3～6歳の子どもを持つ父親1709名を対象に、研究者が独自に作成した質問紙を用いて調査を行った。質問紙は、協力の得られた保育所に郵送し、対象となる父親への配布と回収を依頼した。質問紙の内容は、対象者の背景および父性行動に影響を及ぼすと考えられる要因（子どもの特性、家族構造、生活時間、父親になる準備性、父親像）に関する24項目と、父性行動に関する35項目（5段階評価）からなっている。尚、本研究では父性行動を、父親が役割を遂行するために行う行動と定義し、以下の7行動に分類してとらえている。

- ①社会化行動：子どもの心の中に社会を導入し、子どもを社会へ押し出す
- ②性役割行動：子どもが性役割を学ぶモデルとなる
- ③保護行動：家庭の経済的基盤を支えることを含めて、子どもを社会の圧力から守る
- ④養護行動：具体的に養護行動に取り組む
- ⑤妻への実質的支援行動：家事をするなど母親を実質的に支援する
- ⑥妻への精神的支援行動：母親を精神的に支援する
- ⑦リーダーシップ行動：家族のリーダーである

7種類の父性行動それぞれに、5項目5段階（1～5点）の質問項目を設定した。従って、各父性行動の得点範

囲は、5点～25点となり、父性行動総合得点は、35点～175点となっている。

データ収集は、1992年6月4日から8月30日に実施した。分析は、統計パッケージHALBAUを用いて基礎統計量・度数を算出し、各要因と父性行動との関連については一元配置分散分析を行った。

Ⅲ 結 果

1) 対象者の背景

1116名の対象者から回答があり、回収率は65.3%であった。対象者の年齢構成は、30歳代の父親が66.4%と2/3を占めていた。

生育歴における子どもとの関わりの経験については、あると回答した父親は42.1%、ないと回答した父親は57.9%であり、子どもとの関わりの経験のない父親の方が多いことがわかる。対象者の子どもの数は、平均2.3人、子どもの平均年齢は4.5歳、男の子52.9%、女の子47.1%であった。父親の子どもとの最初の対面は、出生後1時間以内が59.6%で最も多く、出生後12時間以内23.3%、出生後1日以内5.5%、立ち会い分娩5.4%、出生後3日以後3.8%、出生後3日以内2.4%であった。立ち会い分娩を含めると65%の父親が1時間以内に子どもと対面していた。家族形態については、核家族60.4%、親族等と同居39.6%で、核家族が6割を占めていた。子どもの誕生した後の夫婦関係は、変わらない56.6%、深まった39.5%、距離ができた3.9%であった。父親の仕事の時間帯は、「昼間一定時間自宅外で勤務している」56.4%、ついで「早朝から、又は夜遅くまで、自宅外で勤務している（例：農業、漁業、営業）」19.2%、「不規則に自宅外で勤務している（例：三交代など）」11.5%、「自宅内で自営業などの仕事をしている」8.8%、「その他」4.1%であり、仕事の時間帯が規則的な父親は約6割であった。母親の仕事の時間帯は、「昼間一定時間自宅外で勤務している」56.8%、「自宅内で自営業・内職等の仕事をしている」21.6%、「不規則に自宅外で勤務している」6.6%、「早朝から、又は夜遅くまで、自宅外で勤務している」3.4%、「その他」11.6%であり、父親に比べて家庭で子どもと関わる時間が比較的とりやすい仕事の時間帯であった。また、市街地と郡部地域とでは、地域社会との繋がりや家族形態、あるいは父親の仕事内容や価値観等が異なると考えられ、それらの環境の相違によって父性行動に違いがあるのかを明らかにするために、対象とした保育所の所在地によって3地域に分類した。結果、「海岸地または山間地」40.9%、「郡部中心地」30.4%、「高知市内」28.7%であった。

2) 父親が子どもと過ごしている時間

父親が実際に子どもとどのくらいの時間を過ごしているかは、平日では3時間以上が一番多く25.6%、1時間以上2時間未満が24.6%、2時間以上3時間未満が23.5%、1時間未満が18.8%、なしが7.5%であった。これに対して、休日では、3時間以上が71.1%を占めていた。

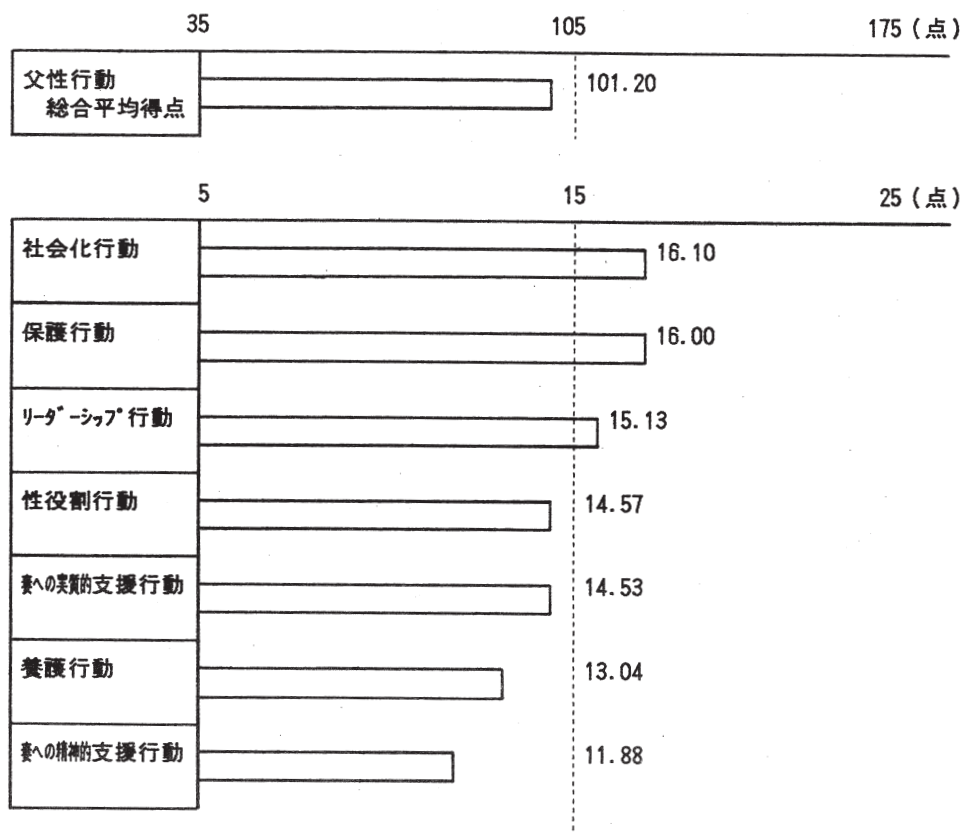
一方、父親が子どもとどのくらいの時間を過ごしたいと思っているのかは、平日では、3時間以上が45.4%、2時間以上3時間未満が25.0%、1時間以上2時間未満が20.6%、1時間未満が6.7%、なしが2.3%であった。休日では、3時間以上が77.9%、2時間以上3時間未満が10.6%、1時間以上2時間未満が6.8%、1時間未満が2.6%、なしが2.1%であった。相対的に見て、平日には、約半数近くの父親が子どもと3時間以上一緒に過ごしたいと希望しているにもかかわらず、実際は過ごせていないが、休日には希望時間一緒に過ごすことができているといえる。子どもと夕食を一緒に食べる頻度は、「週に5～7日」が58.0%、「週に1～2日」が21.1%、「週に3～4日」が15.6%、「その他」5.3%であった。子どもと風呂に一緒に入る頻度は、「週

に5～7日」が37.2%、「週に1～2日」が27.7%、「週に3～4日」が23.1%、「その他」12.0%であり、夕食に比べてばらつきがあった。

3) 父性行動

対象者のとっていた父性行動の平均得点は、総合平均得点101.20、社会化行動16.10、保護行動16.00、リーダーシップ行動15.13、性役割行動14.57、妻への実質的支援行動14.53、養護行動13.04、妻への精神的支援行動11.88であった。

図1 父性行動得点



庄司らの調査研究によると、母親が期待している父親の役割の上位に「具体的な育児・家事への支援」や「妻への精神的支え」が上げられている。また、我々の調査が保育所に通っている子どもの父親を対象としたものであり、母親は育児・家事以外の仕事を持っている現状を考慮すると、妻への実質的支援行動、養護行動、妻への精神的支援行動は得点が低いと言える。

4) 父性行動に影響する要因

父性行動に関係していると考えられる25項目の要因について、父性行動総得点との関わりにおいて一元配置分散分析を行った結果、“生育歴における子どもとの関わりの経験”“子どもとの最初の対面”“子どもの出生順位”“夫婦関係”“自分の父親に対して抱いている父親像”“理想とする父親像”“父親としての自己像”“平日子どもと一緒に過ごす時間”“休日子どもと一緒に過ごす時間”“平日子どもと遊ぶ時間”“休日子どもと遊ぶ時間”“平日子どもと一緒に過ごしたい時間”“休日子どもと一緒に過ごしたい時間”“夕食を一緒に食べる頻度”“風呂に一緒に入る頻度”の15項目の要因について父性行動総得点に有為な差が認められた ($p < 0.01$ または $p < 0.05$)。

表1 父親の要因と各父性行動得点との関連

要 因		父性行動 総 得 点	社会化行動	性役割行動	妻への精神的 支援行動	妻への実質 的支援行動
父親になる準備性	父親の年齢	—	—	—	—	—
	生育歴における子どもとの関わり経験	*	**	*	—	—
	子どもとの最初の対面	**	**	**	**	—
子どもの特性	子どもの年齢	—	—	—	—	—
	子どもの性別	—	—	**	*	—
	子どもの出生順位	*	**	—	—	**
	子どもの数	—	—	—	—	—
家族構造	妻の年齢	—	*	—	*	—
	同居の有無	—	—	—	—	**
	夫婦関係	**	**	**	**	**
父親像	自分の父親に対する父親像	**	—	—	**	—
	理想とする父親像	**	*	**	**	—
	妻が期待していると思う父親像	—	—	—	—	—
	父親としての自己像	**	**	**	**	**
生活時間	平日子どもと一緒に過ごす時間	**	**	—	**	**
	休日子どもと一緒に過ごす時間	**	**	**	**	**
	平日子どもと遊ぶ時間	**	**	**	**	**
	休日子どもと遊ぶ時間	**	**	**	**	**
	平日子どもと過ごしたい時間	**	**	**	**	**
	休日子どもと過ごしたい時間	**	**	**	**	**
	父親の仕事の時間帯	—	—	**	—	**
	妻の仕事の時間帯	—	—	—	—	**
	夕食を一緒に食べる頻度	**	**	—	—	**
	風呂に一緒に入る頻度	**	**	**	**	**
居住地域		—	—	—	—	—

* : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$

— : N. S.

また、25項目の各要因と7種類の父性行動の得点との関連をみると、それぞれに多くの関連がみられた。しかし、25項目中、“父親の年齢” “子どもの年齢” “子どもの数” “妻が期待していると思う父親像” “居住地域” の5項目については、7種類の父性行動のいずれとも有意差がなかった。

Ⅳ 考 察

1) 父親の役割に関する理論的背景

Personsは、家族の2大機能として、「成人のパーソナリティーの安定をもたらすこと」と「子どもの初期の重要な社会化を行うこと」を上げている。また、子どもの発達の初期段階において、子どもが母親との間に基本的信頼関係を成立させることの重要性は、E. H. エリクソンはじめ多くの研究者の指摘するところである。さらに、子どもが発達に伴って自分の世界を家庭の外へと広げていくことができること、つまり子どもの社会化を効果的にするための条件としてウィニコットは、「母親の乳児に対する没頭」「乳幼児を抱き支えること(holding)」「望ましい発達過程を推進すること」「発達につれて次第に望ましい環境からほほよい環境への移行がおこること」の4項目を上げている。また、これらの条件を整えるためには、母親と子どもという一つの単位をその外側から支える父親が重要であり、ウィニコットはこの父親の役割を「母親が心身ともに快適に過ごせるように援助し、道徳的にも支え父親の持っている肯定的な特質や他の男性とは一味違う何かを子どもに示す」と論じている。また、川井も述べているように、母親が胎児との生物-心理的(bio-psychological)な関係を基盤に母親意識を持ち得るのに対し、父親は母親を通し社会-心理的(socio-psychological)な関係を基盤に父親意識の発生をみるというところに基本的な差異があるとされ、父親は子どもに対して母親とは違った関係において、独自の役割を受け持つ者であると言える。そこで、我々の分類による父性行動の中でも父親の役割としてより特徴的であると思われる「社会化行動」「性役割行動」「妻への精神的支援行動」「妻への実質的支援行動」の4行動について、父親の持つ要因のうち「父親像」の4項目を除く21項目とそれぞれの行動がどのように関連があるのかについて詳しく分析した。

2) 社会化行動と父親の持つ要因との関連

父親の持つ要因21項目中、13項目について有意差が認められた。“生育歴における子どもとの関わりの経験”では、関わり経験のある父親の方がない父親よりも得点が高かった($p < 0.01$)。この結果からも子どもとの関わり経験の重要性が示唆される。“子どもとの最初の対面”では、立ち会い分娩あるいは生後1時間以内に対面した父親は、生後12時間以後24時間以内に対面した父親よりも得点が高かった($p < 0.01$ または $p < 0.05$)。父親と子どもとの最初の対面時期については、既存の研究からも、父子の接触を出来るだけ早期に長く保つことが、父親が子どもに投入する上で重要であると指摘されている。出生後、乳幼児期の父子の関わりによって父性行動に変化を生じる可能性はあるが、今回の研究においては、早期に対面した父親ほど父性行動得点が高いという傾向があった。

“子どもの出生順位”では、第1子の父親が第3子の父親よりも得点が高かった($p < 0.01$)。第3以降の父親は、第1子・第2子の父親に比較して得点が低い傾向があるが、これは上に兄弟がいると、その関係の中で社会性を学ぶ機会が多く、父親がそのような行動をとる必要性が低いためとも考えられる。

“妻の年齢”では、40代の妻をもつ父親よりも20代の妻を持つ父親が得点が高かった($p < 0.05$)。妻の年齢が若いと育児を含む社会生活全般についても経験が浅いことが多く、その未熟さゆえに夫は育児に手を出さ

ざるを得ないとも考えられる。“夫婦関係”では、子どもが生まれて夫婦の絆が深まったとする父親の方が、変わらない、あるいは距離が出来たとする父親よりも得点が高かった ($p < 0.01$)。育児を通して夫婦で協力しあう機会が多くなり、家族の心理的な絆が強まることで父性行動をより積極的に行う要因になっているとも考えられる。

“平日子どもと一緒に過ごす時間”と社会化行動との関連では、一緒に過ごす時間が長いほど得点が高かった ($p < 0.01$)。“休日子どもと一緒に過ごす時間”との関連では、2時間以上一緒に過ごす父親は、2時間未満の父親よりも得点が高かった ($p < 0.01$ また $p < 0.05$)。“平日子どもと遊ぶ時間”との関連では、少しでも遊ぶ時間をとっている父親の方が、全然遊ばない父親よりも得点が高かった。また、2～3時間一緒に遊んでいる父親は、1時間未満の父親よりも得点が高かった ($p < 0.01$)。“休日子どもと遊ぶ時間”との関連では、一緒に遊ぶ時間が長いほど得点が高かった ($p < 0.01$)。“平日子どもと一緒に過ごしたい時間”との関連では、過ごしたい時間が多い父親ほど得点が高かった ($p < 0.01$ または $p < 0.05$)。“休日子どもと一緒に過ごしたい時間”との関連では、3時間以上一緒に過ごしたい父親は、それ以下の時間の父親よりも得点が高かった ($p < 0.01$)。“一緒に夕食を食べる頻度”との関連では、週に5～7日夕食を一緒に食べる父親は、夕食を一緒に食べない父親よりも得点が高かった ($p < 0.01$)。“一緒に風呂に入る頻度”との関連では、週に1～2回でも一緒に入る父親は、全然一緒に入らない父親よりも得点が高かった ($p < 0.01$)。以上により、生活時間に関してまとめると、社会化行動は子どもと一緒に過ごしたいと思い、実際に子どもと接触している時間が長いほど得点が高いと言える。

3) 性役割行動と父親の持つ要因との関連

父親の持つ要因21項目中、11項目に有意差が認められた。特徴的なものを述べると、“子どもの性別”では、男の子の父親の方が、女の子の父親よりも得点が高かった ($p < 0.01$)。川井らの研究においても、父親は、男の子は父親が、女の子は母親がしつけるべきという性役割意識を明瞭に持っていることが示されている。今回の調査でも、父親は同性の子どもの方により関わりが多いという結果であった。“子どもと過ごす時間・遊ぶ時間”に関しては、毎日子どもと一緒に過ごす時間より、子どもと遊ぶ時間の長さにより関連があり、性役割行動は意図的な働きかけであるとも言える。“父親の仕事の時間帯”との関連では、自宅内自営業等の父親は、自宅外の規則的勤務の父親よりも得点が高かった ($p < 0.05$)。“一緒に風呂に入る頻度”との関連では、週に5～7日一緒に入っている父親は、週に1～2回しか入らない父親よりも得点が高かった ($p < 0.05$)。性役割について子どもに示す機会の多い父親は、得点が高いとも言える。

以上をまとめると、性役割行動には、子どもと一緒に過ごす時間の長さだけでなく、父親の性役割意識と意図的な行動がより関連しているものと考えられる。

4) 妻への支援行動と父親の持つ要因との関連

精神的支援行動は、父親の持つ要因21項目中11項目、実質的支援行動は、21項目中13項目に有意差が認められた。両行動の相違点を述べると、“子どもとの最初の対面”では、精神的支援行動は、生後12時間以降24時間以内に対面した父親が、それより早く対面した父親よりも得点が低かった ($p < 0.01$ または $p < 0.05$) が、実質的支援行動には有意差はなかった。“子どもの性別”では、精神的支援行動は、男の子の父親が女の子の父親よりも得点が高かった ($p < 0.05$) が、実質的支援行動には有意差はなかった。“子どもの出生順位”では、実質的支援行動は、第1子・第2子の父親が、第3子の父親よりも得点が高かった ($p < 0.01$ または $p <$

0.05)が、精神的支援行動には有意差はなかった。“妻の年齢”では、精神的支援行動は、20代の妻を持つ父親が、40代の妻を持つ父親よりも得点が高かった($p < 0.05$)が、実質的支援行動には有意差はなかった。

“同居の有無”では、実質的支援行動は、核家族の父親が、核家族以外の父親よりも得点が高かった($p < 0.01$)が、精神的支援行動には、有意差はなかった。“父親の仕事の時間帯”では、実質的支援行動は、自宅外での規則的または不規則な仕事を持つ父親が、早朝または深夜までの仕事を持つ父親よりも得点が高かった($p < 0.01$ または $p < 0.05$)が、精神的支援行動には、有意差がなかった。“妻の仕事の時間帯”では、実質的支援行動は、妻が自宅外で仕事を持つ父親が、妻が自宅内の仕事を持つ父親よりも得点が高かった($p < 0.01$)が、精神的支援行動には有意差がなかった。“夕食を一緒に食べる頻度”では、実質的支援行動は、週に3日以上一緒に食べる父親が、週に1~2日しか一緒に夕食を食べない父親よりも得点が高かった($p < 0.01$)が、精神的支援行動には有意差がなかった。

以上のように、精神的支援行動と実質的支援行動は、内容的には若干の相違があり、精神的支援行動は、「出生後、早期に対面」「子どもが男の子」「妻の年齢が20代」の父親が得点が高く、全体的には子どもと過ごす時間が長い父親ほど得点が高い傾向があるのに対して、実質的支援行動では、それ以外に「子どもが第1子または第2子」「核家族」「仕事の時間が規則的」「妻が自宅外で仕事をしている」「週に半分以上夕食を一緒に」の父親が得点が高く、子どもと関わらざるを得ない状況にある父親が得点が高いとも考えられる。つまり、精神的支援行動は、父親の主體的な父性行動であるのに対して、実質的支援行動はどちらかというと、父親の主体性よりも、家族の状況によって必要性の高い行動をとっているとも言える。

結 論

4種類の父性行動と父親の持つ要因との関係をまとめると、【図2】、父親になる準備性では、“生育歴における子どもとの関わり経験”と“子どもとの最初の対面”に有意差があり、これは父性を涵養する上においては、思春期からの父親教育の必要性や、出生時に父親が子どもと出来るだけ早期に対面することの有効性を示唆するものであると思われる。

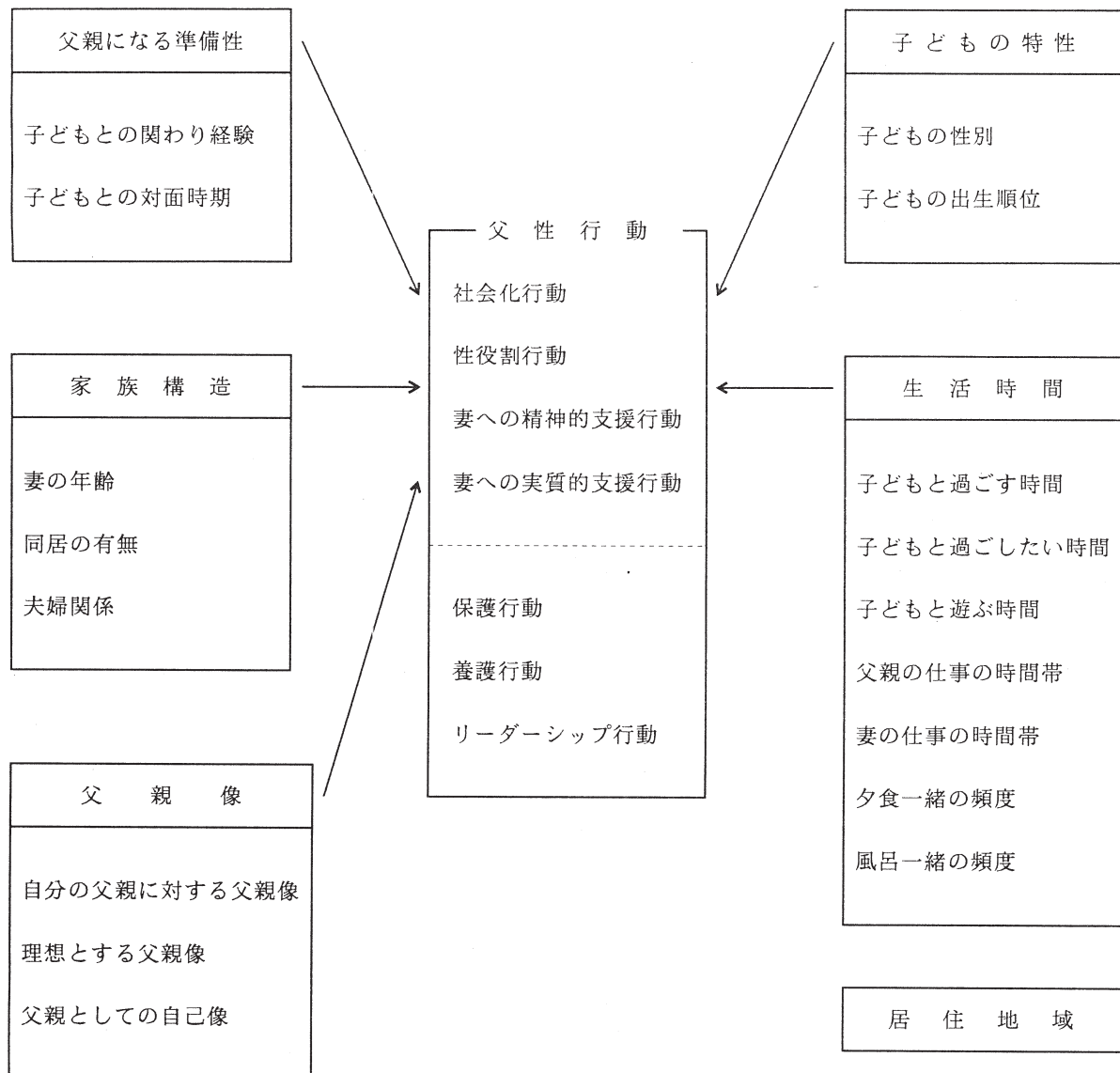
子どもの特性では、“子どもの性別”と“出生順位”に有意な差がみられ、父親は男の子に対してより多くの関わりを持つこと、また第3子以降の子どもに対しては第1子・第2子よりも関わりが少ないことが示された。これは、父親の意識というより、子どもの数が多いと兄弟相互の関わりが多くなり、父親が関わる必要性が減少するとも考えられる。

家族構造では、意識的な面では、“妻の年齢”が、実際の面では“同居の有無”が有意な差があったが、“夫婦関係”はいずれの父性行動においても有意差があり、育児に対する夫婦の協力の重要性が示された。

生活時間においては、全体としては子どもと過ごす時間が多い父親が、過ごす時間が少ない父親よりも得点が高い傾向にあったが、性役割行動や妻への精神的支援行動では、時間の長さだけが絶対的な要因ではなく、父親の意識的な関わりが重要であることが明らかになった。

また、父親像については、我々の過去の研究で述べたように、“自分の父親に対する父親像”“理想とする父親像”“父親としての自己像”とに関連があった。

図2 父性行動に関する要因図



居住地域における有意差は認められなかった。マスコミ等における情報が大きな影響を及ぼしている現状では、高知県下の保育所に通う幼児を持つ父親の父性行動は均質化しているとも考えられる。また、父親の背景の偏りや質問紙自体の限界も予想され、今後の検討課題となっている。

以上の結果より、父性行動はそれぞれの行動毎に父親の持つ要因と特徴的に関連していた。従って、父親の役割を考えていくためには父性行動全体としての視点とともに、それぞれの家族においてどのような行動をどの程度行えば、父親としての役割を適切に受け持ち、母子を支えていくことができるかという個別のアセスメントが必要である。

おわりに

今回の研究においては、7種類の父性行動のうち、社会化行動、性役割行動、妻への精神的支援行動、妻への実質的支援行動の4行動と父親の持つ要因との関連性が明らかになった。今後、父性行動をより包括的にとらえる質問紙を検討するとともに、父性行動に関する要因の分析枠組みを整理していきたいと考える。

稿を終えるにあたり、調査にご協力いただいたお父様方、および保育所の保母の先生方に深謝いたします。

引用・参考文献

- T. パーソンズ、R. F. ベールズ著、橋爪貞雄他訳、家族「核家族と子どもの社会化」合本、黎明書房。
- D. W. ウィニコット著、北山修監訳、小児医学から児童分析へ、岩崎学術出版社。
- 川井 尚、育児における父親の役割、小児保健研究、第51巻、第6号、p 671-680、1992。
- 川井 尚他、育児における父親の役割に関する研究Ⅲ－総括報告－、平成3年度厚生省心身障害研究「高齢化を迎えるに当たっての母子保健事業策定に関する研究」報告書
- 恒次欽也他、育児における父親の役割に関する研究－父親・母親を対象として－、平成5年度厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」報告書
- 庄司順一他、育児における父親の役割に関する調査研究、平成6年度厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」報告書。
- 益守かつき他、幼児期の子どもを持つ父親の自己イメージと父性行動、第41回日本小児保健学会講演集、p 324-325、1994。